

遠い蟻たちの叫び

アレクサンドル・ウルーソフ

それから世界は再び方向を変えた。そして世界の中のいっさいのことどもは元の場所に戻った。ぼくを除いて、いっさいが。ぼくは逆吊りになったままだった。けれども、だれひとりそのことに気づかなかった……

八月十二日、逃亡を試みて捕えられた囚人が、生きながらに、第四ブロックの壁の中に封じ込められた……

真暗になった。薄明が部屋を遣い、四聞のすべてが異様で亡霊じみた相貌をあらわした。闇とともに部屋の中にはいつてきたものいっさいが、定かならぬささめきで、ひそやかなほとんど無音のささやきで、部屋を満たした。そして、わけでも、これらの恐怖の物語でもって。それらは常にぼくとともにある。それらはぼくの裡^{うち}にある。

パート 1：沈黙

《墓掘人足等ハ待ッテイル……彼等ハ待ッテイル。……彼等ハ既にオ前に土ヲカブセテイル、父ヨ……》

F・ケベード

真暗になってしまった。脳髓をまるでかみそりでなでたようだった。頭痛。すべてが混乱してしまった。だれやら幾たりかの者たちが部屋にはいつてきた。と、すべての物体がいつもの場所から離れて、どこかへと泳ぎだした。それからなにもかもひっそりと静まりかえった。静かだ。うつろな打音が悲しげに鳴っているだけだ。こめかみの、血かも知れない。あるいは教会の鐘の音なのかも知れない。

想念はもつれ、滑走する、ぼくがそれらを取り集めようとしても、それらは、再

び散り散りになる。もはや、ぼくは一握の想念を^{たなごころ} 掌の中につかまえておくことができない。根本を理解したいのに。真実を発見したいのに。

意識の中に霧がたちこめ、何やら湿気が充満し、そのために脳髄はそぼ濡れ、死せる白い芽を吹かせている。真実の無い想念。そのような想念でぼくは一杯だ。意識の中の霧。その中にぼくは溺れ切っている。

^{ラース ドヴァー トリー}
いち、に、さん。開いた窓ひとつから寒冷と湿気とそしてなにやら名状しがたい憂愁が吹き流れてくる。この寒冷と憂愁が血管にあふれ、心臓の中に潜り込む。^{ラース ドヴァー トリー}
む。いち、に、さん。それらは肺の中に沈澱し、口腔を塞ぎ、のどを鉄で締めあげる。^{ラース ドヴァー}
あげる。いち、に。

たそがれが濃密になってゆく。闇の中から窓ひとつに向かって、鈍い緑色の、まるで水液の厚みの底をくぐり抜けて来たともいう何かあるものが這い出す。それは窓ガラスにへばりつき、直視する。ぼくは目を閉じた。^{トリー チェトイレ ビヤチ}さん、し、ご。目をあけた。それは消え失せている。しかしその眼差しは残されたままだ。

ぼくらはラーゲリから逃げた。ぼくらは逃げた。ぼくらは森の中を進んでいた。ぼくらは夜中に進んでいた。そしてそのとき彼は片脚を脱臼した。ぼくは彼を背負って歩いた。朝が来たのでぼくらは停止せざるをえなかった。ぼくらは一軒の納屋に身を横たえていた。むっとする腐った干草と堆肥の臭いがたちこめていた。いっさいがぼくらの何者かを暴露することができたのだった。ぼくらの衣服、ぼくらのかみそりをあてていない痩せこけた顔。彼の脱臼した脚が。ぼくらは森の中に、そこの一軒の納屋の中に身を横たえていた。窓からひとりの男がぼくらをながめていた。その男の眼差しをぼくは憶えている。彼は売るだろう、この男は。そうした視線を、彼は持っている。

これが最後だとぼくは悟った。

この視線を自分の身のうえに感じた瞬間、さらになにかをぼくは悟った。世界

が方向を変えた、とぼくに思えたのは、そしてそのときだった。この一瞬が、世界の逆倒する軸となったのだ。

それとも、ぼくは単に夢の境界に立っていただけだったかも知れぬ。不自然で居心地の悪い立場に。それもひどく居心地の悪い立場にだ、なぜならぼくはただちにいっさいを悟ったのだから。ぼくには、立ち去るべきときだとわかっていた。ひとりして。自分ひとりで立ち去るだろうと、そのときぼくにはわかっていた。

彼は、むっとする腐った干し草と堆肥の臭気がたちこめたその納屋に身を横たえたままだった。ぼくは振り返った。彼は身じろぎもせず横たわっていた。しかし彼は眠ってはいなかった。彼もそのときいっさいを悟っていたのだ。なにかあることを、頼むことは無意味だった。だから彼は一言も発しなかった。

そして今、彼は壁の中に囚^{とら}われている。ところがぼくは生きている。彼はしばしばぼくのところへやって来る。彼がやって来ると、ぼくらは起こったことについて黙している。そして、彼の前でぼくが罪人であることについて。そのことについて彼はぼくに一度として言ったことはなかった。

真暗になってしまった。ぼくを包んだ闇の中に小さな灯が燃えはじめる。窓の矩形がその闇の中に依然として白々と見える。空の、霧たちこめた矩形が……

幾つかの悲しい物語
頭痛のときに聞いた
壁の中に囚われた男から

1 遠い蟻の道

ぼくらは汽車に乗っていた、だれもかれもぶつつづけに窓の外をながめていた。けれども窓の外にただ霧しかぼくには見えなかった。ぼくらの列車の疾走する涯しない荒野の中で、列車を取り巻いているものはただ霧のかかった薄明にすぎなかった。そしてわずかに、かろうじて聞こえてくるのは車輪の打つ音だけだった。ときおり霧の中に町々が姿をあらわしもし、あるいは夜半にぼくらは灯

火をみとめもした。しかし、それは幻影にすぎなかった、しかもぼくら皆にはそれがわかっていた。ぼくらの四囲にあるのはただ、ただ、霧だけ。そして夜なぞまったくありはしなかった。

それでもぼくらは皆、ぶつつづけに窓の外をながめ、ぼくらの列車とならんで霧の中を蟻たちが涯しない列をなして匍匐^{ほふく}している様を見ていた。涯しない蟻の道。それは霧の中に隠れて、あるときはぼくらから遠のき、またあるときは彼らの静かな声やささやきがぼくらに聞こえるほどに接近して来るのだった。そんなふうさらさら鳴っていたのは森の中の枯葉だ。

蟻の、永久運動。昼も夜も霧の中で蟻たちは這っている。そして夜は彼らにとってには存在しない。

ぼくらは皆——この列車の永遠の乗客たち——窓々にかじりつき、その声に耳をすましていた。森の枯葉のかさこさという音に似たそれらの声声。

黄色い木の葉がゆっくりと舞い、そしてかくも上品に端正に、枯葉のような黄色の人間たちが舞い上がる。彼らの顔の皮膚は、数世紀かかって乾き切った黄色い羊皮紙だ。鳥たちはと言え、かくものどかに、かくも屈託なげにさえずっている。そのヒナ鳥たちは無邪気な悪戯に懸命だ。黄色い砂をまき散らしている。

枯葉がくるくる回る、回る。そして人々は道をすすみ、彼らの悲しい唄の最後の音が静かに消えてゆく。そう、今、丘のかげに最後のひとりが見えなくなった。

そして鎖枷^やの静かな響音が鎮んでしまった。

ただ風だけが枯葉を地に吹き流し、それらをつまぐり、そして何ごとかをささやき合っている。

パート1 了

そして新たに世界が方向を変えた。そして再び世界の中のいっさいのことどもは元の場所に戻った。ぼくを除いて、いっさいが。ぼくは逆吊りになったままだった。そしてすべての人がぼくをながめていた。すべての人がこう言った。《この男を見たまえ。逆吊りになっている》と。そしてだれもが笑い出した。

パート2 いしゅう 蝟集せる叫声

ぼくは戦争廃疾者だ。ぼくは家の中庭に^か椅けて、遊んでいる子供たちをながめている。彼らはぼくをこわがっている、あの子供たちは。猫小路のわが家の中庭にぼくが椅けていると、彼らはこわがる。身体不随でいすにつながれ、幼児のように無力なぼくが椅けていると。ぼくが自分のそよとも動かぬ姿で子供たちをギョッとさせているのだが、しかしそれはぼく自身にさえ、恐ろしい。

ぼくは夜をおそれている。おそれている、というのも二十年前ぼくは自分自身を死から救い出したのだから。死んでしまうはずだったのに。

その不幸が彼の身に起こったとき、彼は自分をふと時間の埒外にあると感じた。彼は、もちろん、時間が存在し、彼に起こったことが独立に存在していることを理解していた。しかし時間は、彼にとって重要なものであることをやめてしまった。そしてそのとき初めて、彼の死ぬ日が、たんなる時間の切断以上のなにかになりえたのだった。その日が、厚い塵埃の中に刻まれた無限の、無色の線になったと彼に思えたとき。そしてどこか中程のところ^で断ち切られた線。死によって。しかし、それはほとんど気づかれることもなかった。彼は生き残ったのだから。彼は、すべての人々となにかまったく異なったふうに時間を感じだしたにすぎなかった。そしておそらく、彼は人間であることをやめたのである。けれども、そんなことは全然重要なことでない。

ふたりのゲシュタポが彼の腕をつかんで地面をひきずって行った。彼の両脚は塵埃のなかで力無くぶらぶら揺れていた。そして、それは後に二つの屈折した無限に続く線を残した。厚い塵埃のなかに。

何か巨大なものがぼくをつかまえた。それは時間の上にぼくを持ちあげた。そして後方に投げた。意識は引き離されてしまった。意識の現実的な表面の外被はその場所にとどまったままだったが、しかしぼくはすでにどこかに向かって疾駆していた。一瞬、生の何かある切れ切れの断片が浮上した。そしていっさいが後方に押し流されてしまった。現在は過去の中に没し去ってしまった。何かが、その場所から接近して来た。死者たちが生者にとってかわったのだった。

ぼくらは第四ブロックの壁際に突っ立っていた。風は、着ているものをぼろぼろに引裂き、乾いた針を丸裸の肉体に突き刺してきた。

《君ニモチロン罪ハ無イ。モチロン罰ハ無イ。シカシソレデモ時ニ私ハ君ノ許ニヤツテ来ルダロウ。夜毎夜毎ニ。ソウスレバ君ハツイニ悟ルダロウ、君ハマツタク罪ノ無イコトヲ》

風はさらに新しい力で打ちつけた。一瞬間ぼくは目をつむった。そして一瞬後、すでに彼はいなかった。ぼんやりしたシルエットが壁に沿って遠のいて行くところだった。風が彼から実体の片鱗さえをも吹き払っているように思われた。そして彼は消え去っていった……

朝方、壁の中に、囚われた男は叫び止んでいた。ぼくの客たちは四方に散って行くところだった。彼らは部屋の中を陰気にうろつき、ねむたげにあくびをし、そして彼らの影は明方の簿明の中にすうとかき消えていった。

最後に去っていったのは不思議な女だった。彼女は尼僧だった。しかし、彼女はどんな衣服も着ていなかったのだから、そうだと確言するわけにはゆかないのだが。それは奇妙な女だった。数年の間彼女はぼくの許にやって来ていた。一度も一言も発したことはなかった。ただ黙し続け、微笑を浮かべているばかりだった。あるとき、彼女は夜明けにやって来た。ひどく蒼白な顔をしていた。そして、なにか自分のことをぶつぶつぶやいた。初めてぼくは彼女の声聞き、ゾツとした。ふとぼくは、その女が今日死ぬにちがいないと感じた。そして朝、ぼくは部屋の隅に斬殺されている彼女を見出した。

壁の中に囚われた男から
聞いた物語の
うち

2 新アポカリス。アダージョ

《人は溶けてなくなった。この異様……》

M・パノーフ

男は両腕を広く投げだして横たわっていた。そうして空を見つめていた。小糠雨がそぼ降っていた。道路を、泥濘ぬかるみにはねを飛ばし口汚く罵しりあいながら、兵隊たちが足をひきずって行った。四輪の荷馬車がきしりながら通ってゆく。負傷者たちはうめき声をあげていた。

彼は広く両腕を広げて、道ばたに横たわっていた。まばたきもせず、空を見つめていた。彼はまだ生きていようなふうだつた。眠っている。けれども両眼は見開かれて、空を見ている。そして涙がいっぱいたまっている。しかし、それは雨にすぎないのだ。一時間前に、彼はとても休息したがっていたのだった。

そしてみよ、いま、彼は道ばたで眠っている。

……彼は長いこと話した。非常に長いこと。際限もなく長いこと。彼は自分の物語に呑みこまれていた。音を発するのが嬉しかった。自分の発した音という音がことばになってゆくということも。彼は疲れを知らずに話すことができた。そして人々は彼の話に耳を傾けながら、泣いたり笑ったりした。彼は話す術を心得ていた。彼の物語から生みだされた想念や感情をことばで書きとめることは不可能だ。それは、悲しい光を放射するなにか巨大なあるもの。彼の物語の中には何か表現を越えた悲しいものがあつた。おそらく、この悲しみこそが彼の物語に、絶えず聞き手たちを驚愕させたあの異様な色調を付与したに違いない。

彼は長いこと話した。非常に長いこと。彼は、黙すことなく、ほとんど二〇年続けざまに話した。ゲシュタポに彼の舌が引き抜かれたそのときから……

壁の中に囚われた男の

最後の物語

ゲシュタポにその舌を引き抜かれた男の

3 蟻の家での長い夜

ぼくとぼくの兄、ぼくらはふたりとも蟻だ。ぼくは一生涯、暗闇の中で過ごし、一度も太陽を、日の光を見たことがなかった。それがいったいどんなものかぼくは知らない。ところがぼくの、彼はぼくよりずっと年上だが、兄は、ずっと昔に太陽を見たことがあると語ってくれるのだった。彼は、自分は清らかな透明な大気をひどくよく覚えている、それはすっかり太陽の光に刺し貫かれている、というのだった。ぼくにはそれが全然想像もつかなかった。だからぼくは兄のことばを信じていなかった。この世に、闇の外は何もないとぼくは確信していた。ぼくはこの闇には慣れ切っていた。闇の中からの出口を求めることは無意味なことだとぼくには思われた。監獄に出口は無い。ぼくらの監獄——それは全世界なのだ。しかし兄は何かある出口を捜し求めている。そこでぼくも、彼に従って捜し求める。ぼくは捜してみても、ぼくらのこの探索がどれほどばかげたものか承知しているのだ。昼も夜もぼくは兄からきかされる。《どこかに出口はある。あるとも、あるとも！俺たちは捜し出さなければ、発見しなければならない。前進、前進だ！》

そして昼も夜もぼくらは、一秒の休息も知らずに、その出口を求め続けることを強いられている。でもぼくらの周囲はただ暗闇の湿っぽい壁ばかり、一筋の閃きすらもない。

……ぼくの兄は完全に気が狂ってしまったのだ。彼は要求するのだ。壁にいどみかかり、手足を血まみれに裂いてまでぼくらが間断なく常に闇の中を匍匐することを。そしてぼくが絶望に圧倒されればされるほど、それだけいっそうおおきな確信をぼくの兄は獲得するのだ。そうだと、彼は狂人だ。彼の裡には、何か愚鈍な、ファナティックな執念深さがある。彼はただ、光と太陽の偏執に、自分自身で捏造した想念にとりつかれているに過ぎないのだ。

ぼくがどうすべきか、ぼくにはわからない。ぼくは兄が怖ろしい。これ以上ぼくは我慢できない。体力はぼくを見捨てている。ぼくはまもなく滅びるだろう、そんな気がする。休息の短い数分のあいだ、ぼくは泣く、でも兄はぼくの涙を見ようもしない。《前進だ、前進だ》——と彼は叫び、そしてぼくは闇の中へ涙をこぼしながら匍匐しつづける。

そして不意に、ぼくは光を目にした。細やかに碎け、きらめき、いつなんどき

にでも消え失せる用意のできている光。だが、それは光ではなかった！《見ろ、兄さん——とぼくは叫んだ——あそこに光だ！見てよ！》しかし彼は黙っていた。それから彼は言ったのだった。《まだ早すぎる。光であるはずがない。進むんだ、進むんだ。まだ早すぎる。前進だ！》

そのときぼくは悟った。ぼくの兄は盲目になっていたんだ！

突然、暗鬱な蒼穹がひび割れた。まばゆい太陽光線がぼくの顔を打ちすえた。ぼくは目を閉じた。ぼくの意識の中で火炎の球がぐるぐる回っていた。そしてぼくはこれらの球のあいだのどこかで泳いでいた。ぼくは何ひとつ感じなかった。そしておびただしい数の太陽の間をぼくはぐるぐる回っていた。そして世界はゆっくりと方向を転じた。緑の谷間が、ぼくの視界に立ちはだかった。そして世界はゆっくりと方向を転じていた。青の空。ぼくはその場にとどまっていた。早朝のさわやかさに満ちた大気。世界はゆっくりと方向を転じていた。巨大な太陽。けれどもぼくは逆吊りになっていた。太陽は輝いていた。

哀れな盲目の兄は静かにぼくを^{わら}囓っていた。

パート 2 了
(工藤正広訳)

アレクサンドル・ウルーソフ(生年未詳——)ソビエトではその作品をほとんど公けにできない作家のひとりで、ペン・ネームであろう。本編も地下出版社《SMOG》(一九六五年四月レニングラード・モスクワ刊)に掲載された作品である。ロシア語頭文字 Smelost(大胆)、Modost(若さ)Obraz(形象)Glubina(深み)を組み合わせたのが《SMOG》である。

——川端香男里編『現代ロシア幻想小説』(1971)より